筑波大学新聞

第339号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL・FAX 029(853)6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市天王台1－1－1

筑波大生の快挙続く

自転車W杯

梶原世界一

箱根駅伝

相馬出場へ

スタートする梶原選手（12月2日、ミルトンで）＝本人提供

自転車競技の世界大会、UCIトラックワールドカップ第3戦が12月1－3日、ミルトン（カナダ）で行われ、サイクリング部の梶原悠未選手（体専2年）が女子オムニアムで日本人初の優勝を遂げた。また、陸上競技部の相馬崇史選手（同1年）は来年1月2、3日の東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）に関東学生連合チームの5区での出走が内定。筑波大学生の快挙が続く形だ。

（森賀遼太＝社会学類1年、佐藤巧基＝物理学類2年、9面に関連記事）

■自転車競技

オムニアムは「トラックレース」という自転車競技のひとつ。1周250㍍のトラックを、合計距離や得点方法が異なる4種目で周回し、その総得点を競う競技だ。大会では各国の代表選手1人ずつ、総勢15人が出場。梶原選手は日本代表として参加し、全種目を制した。

梶原選手は「夢だった世界一になれて、とてもうれしい。東京五輪ではメダルを取れるように、一層精進する」と話した。

■箱根駅伝

相馬選手は10月14日の箱根駅伝予選会で、589人中69位に入ったほか、11月25日の10000㍍記録挑戦競技会で、29分27秒77と自己記録を大幅に更新、67位につけた。この結果、関東学生連合チーム候補者16人のうち総合5位に入り、本戦の出場を確実にした。

力走する相馬選手（10月14日、東京都立川市で）＝陸上競技部提供

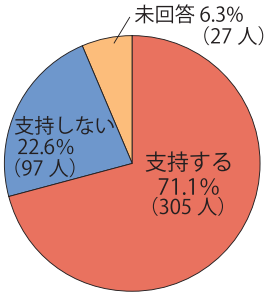
筑波大生の箱根駅伝出場は、2004年に当時の日本学連選抜チームとして往路5区で出場した鐘ヶ江幸治選手（平成15年度上学システム学類卒）以来の快挙。

本戦で相馬選手は標高差800㍍以上を駆け上る過酷なコース、往路5区を走る予定。「登り坂が得意なので、鐘ヶ江さんの記録に少しでも追いつけるように頑張りたい」と話している。

同駅伝は関東の20大学が出場するほか、予選敗退の大学からも、個人成績の優秀な選手が「関東学生連合チーム」として1校1人選出され、計21チームが出場する。

「鐘ヶ江の記録目指す」

安倍内閣を支持するか



本紙アンケート

筑波大生の内閣支持7割超

衆院選の投票率は5割

10月22日投開票の衆院選について、本紙は11月中旬、筑波大学生429人にアンケート調査を実施した。その結果、半数以上の学生が「投票しなかった」と回答。その理由として不在者投票制度を知らなかったり、「面倒だった」などが目立った。その一方で、7割以上の学生が安倍内閣を「支持する」と答えている。

（石川泰行＝社会学類3年、6、7面に関連特集）

アンケートは学内10授業で実施。その結果、「投票しなかった」と回答した学生が232人（54・1％）と、「投票した」（197人、45・9％）を大きく上回った。「投票しなかった」理由を複数回答で聞いたところ、「不在者投票制度を知らなかった」が91人（39・6％）と最多で次いで「投票日に予定があった」が57人（24・8％）で「面倒だった」が49人（21・3％）だった。

また複数回答での「投票した」理由は「政治への意思表示」が113人（57・4％）で最も多く、次いで「国民の義務」が103人（52・3％）、「国政が少しでも良くなってほしい」が67人（34・0％）だった。

大学生と政治

内閣支持 実績を評価

一方、比例代表の投票先では、自民党が最多の96人（48・7％）で、以下立憲民主党43人（21・8％）、希望の党16人（8・1％）と続いた。比例代表の投票先を選んだ複数回答での理由は「ほかにいると思う政党がないが98人（49・7％）でトップで、次いで「政策を支持」が63人（32％）、「支持政党だから」が43人（21・8％）だった。

また安倍内閣については、「支持」が305人（71・1％）と「支持しない」（97人、22・6％）を大きく上回った。支持理由は、「これまでの実績が評価できる」が140人（45・9％）で最多で、「政策を期待できる」（86人、28・2％）、「安倍首相が信頼できる」（43人、10％）と続いた。「他に適当な人物がいない」の回答も複数あった。

本紙は衆院選投開票日の午前9時～午後5時30分、筑波大生が多く住む大学周辺の天王台・天久保地区を対象にした「吾妻中学校投票所」（つくば市天久保、投票者約1000人）でも調査を実施。記者9人が筑波大生と確認できた約150人に聞いたところ、小選挙区では約7割、比例代表では約6割の学生が自民党公認候補や自民党に投票していた。

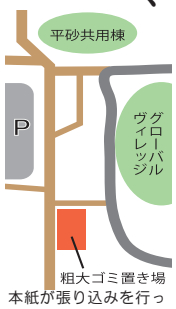
今回の調査結果について、社会学者の土井隆義教授（人社系）は「現代の若者は定を求めており、そうした傾向が投票行動に表れたのではないか。また、高校までの教育が政治に関心を持たせないようになっており、それが若者の政治離れにつながっているのではないか」と話している。

不法投棄続く

宿舎粗大ゴミ置き場

筑波大学の平砂、追越、一の矢の各学生宿舎付近で粗大ゴミの不法投棄が続く問題で、本紙は11月下旬、平砂学生宿舎の粗大ゴミ置き場で張り込みを行い、部外者とみられる人物の不法投棄や捨てられた粗大ゴミを物色する外国人の姿などを確認した。

各学生宿舎周辺では10年以上にわたり粗大ゴミの不法投棄が続いており、膨大な処分費が問題となっていた。これに対し筑波大は今年3月と10月、学生宿舎周辺に粗大ゴミ置き場（高さ2㍍、幅10㍍、奥行5㍍）を設置。学生宿舎に入居する学生に利用を限定したが、調理用の大きなコンロやタイヤなども投棄されている。（本紙取材班、11面に関連ルポルタージュ記事）



本紙が張り込みを行った粗大ゴミ置き場周辺の地図

大学側は8月に防犯カメラを設置したが、現在でも粗大ゴミ置き場には、車や業務用冷蔵庫など、宿舎では普通使用しない廃棄物が不法投棄されていた。

注目記事

性的少数者対応が最高評価 2
ダンス部 公演で魅了 5
バレー 男女準優勝 8
サッカー リーグ優勝 9
雙峰祭 多彩な企画 10

「ミスキャンパス」に輝いた江永さん

宿舎ゴミ問題 現場ルポ 11
ミニ特集 3
約6200人を調査
自転車の交通違反多発
特集 6,7
学生・教員の座談会開催
筑波大生と衆院選

筑波おろし

「一億総活躍社会」実現に向け昨年8月、「働き方改革」が閣議決定された。長時間労働の抑制や非正規社員の給与の引き上げなど、内容は盛りだくさんだ。だがそれで「改革」は十分だろうか▼塾講師のバイトをしているが、塾の指導要領通り授業を進めると生徒の理解が不十分に終わることがあり、悩んでいた。そこで指導要領からあえてそれ、生徒の個性に合わせて授業するよう工夫した。その結果、返ってきたのが「先生の授業のお陰で算数が出来るようになった」との生徒の言葉だ▼指導要領に従うだけでは、さまざまな個性を持つ生徒の学力は向上しない。むしろそこに自らの考えを入れることで、生徒の学力向上につながる場合もあり、自分もやりがいを感じることができる。そう気づいたのはつい最近のことだ▼「仏作って魂入れず」の例えがある。仏像を作っても作者が入魂しなければ、それは真の仏像にならない。転じて、物事をほとんど仕上げながら、肝心な最後の仕上げが抜け落ちていることの例えだ（デジタル大辞泉）▼「働き方改革」は労働環境を改善するが、改革は仏像の外見にしかすぎず、そこに「個人のやりがい」などの「魂」を入れることで真の仏像は完成する。仏の作家・カミュは「魂なき労働は、人生を窒息死させてしまう」とも述べる。改革に伴い、「良い働き方」とは何か、今一度考えたい。

イオンつくば駅前店

来年2月末までに閉店へ

イオンつくば駅前店（12月2日、つくば市吾妻で）＝秋田耕平撮影

同店は国際科学技術博覧会（つくば科学万博）開催の1985年に「ジャスコつくば店」として開店。今年2月28日に閉店した西武筑波店とともに、つくば駅前の商業施設の中核を担っていた。だがつくばエクスプレスの開業に加え、つくば市谷田部や同市筑穂など7カ所に分散していたつくば市役所が同市研究学園に移転・統合するなど、商業の中心がつくば駅周辺から研究学園駅周辺へと移動も検討していると話す。

また、郊外型の大型商業施設が近隣の幹線道路沿いに続々と出店し、売り上げが減少していた。

イオンつくば駅前店入居する駅前ビル「クレオ」（7階建て）を運営する「筑波都市整備」（同市竹園）によると、同店閉店後の後継店舗も見つかっていない。現在、クレオには同店のほか、書店など9店舗が入居。空調設備の維持など運営上の課題もあり、同社の担当者は「各店舗と協議の上、別の場所への移動も検討している」と話す。ただ同社が運営し、クレオに隣接する商業施設、Qt（キュート）の運営は堅調で、クレオに入居する店舗のキュートへの移転も視野に入れているという。

イオンつくば駅前店の閉店で、同店に近い春日学生宿舎に住む女子学生は「宿舎入居時の家具家電のほか日常の食料品などの購入まで便利だった。閉店で生活習慣が変わってしまう」と語った。この女子学生によると、同店が閉店すると近隣のスーパーは更に500㍍ほど遠くなるという。

つくば駅前にある「イオンつくば駅前店」が来年2月末までに閉店することが、同店を運営するイオンリテール（千葉市美浜区）などへの取材で分かった。入居の商業ビル・CREO（クレオ）では、今年2月に西武筑波店が閉店しており、つくば駅前の大型商業施設が続けて閉店することになった。冷蔵庫や自転車など、同店で学生生活の最初の生活財を購入する筑波大学生は多く、影響はさきそうだ。

（秋田耕平＝社会学類2年、森賀遼太、2面に記者の目）

筑波大の性的少数者への対応

大学初の最高評価受賞

筑波大学は、LGBTなど性的少数者に向けた取り組みを評価する「work with Pride 2017」（性的少数者支援のNGOなどが構成する任意団体主催）で、大学で初めて「最高評価のGOLDを受賞した。またGOLDのうち、性的少数者に対する優れた取り組みを実施している5団体が選ばれる、ベストプラクティス（最も優良な実践状況）としても選出された。筑波大は今回の受賞の大きな理由となったガイドラインについて、今年度末に向けて改訂を進める方針だ。（越智小夏＝比較文化学類2年、4面に記者の声）

改訂される性的少数者へのガイドライン（12月5日、筑波大学新聞編集室で）＝秋田耕平撮影

同賞は、「企業内で性的少数者の人々が自分らしく働ける職場づくりを進める」ことを目的に、「work with Pride」が2016年から主催。自動車（横浜市西区）やソフトバンク（東京都港区）企業や団体の性的少数者対応に関するものでは全国で唯一で、今年度は全国から110の団体が応募、日産などがGOLDを受賞した。

筑波大は27年度から、性的少数者への取り組みを本格化した。昨年度からは、性的少数者への対応を行う大学の「ダイバーシティ部門」に、相談窓口を開設。昨年5月には、気が付かないうちにアウティング＝Q＝することを防ぐために、学生の性別を名簿などに記載しないよう全教職員へ向けて通知した。また氏名の変更や更衣室の利用などへの対応方法を定め、今年3月には、大学では初となる性的少数者に関する基本理念とガイドラインを制定した。

同賞では、このような取り組みに加え、ガイドラインで大学としての方針を公開したことを評価。ガイドラインの対象者が学生や教職員含む全構成員となっている点が特に評価された。

受賞を受け、ダイバーシティ部門の河野禎之助教は、「筑波大全体が、性的少数者に限らず多様化が進んでいる。その中で評価されたのは良いことだ」と話した。

同部門はガイドラインの改訂版を今年度末に発表する予定。改訂版では、周囲の人がどう対応すればよいか事例ごとに説明するほか、カミングアウト＝Q＝に備え、気持ちを整理できる記入欄なども記載される予定だ。

Q＝アウティング＝本人の了解を得ず、性的指向や性自認を暴露すること。

Q＝カミングアウト＝これまで公にしていなかった自らの出生や、性的指向などを表明すること。

T-ACT10周年シンポジウム開催

筑波大学が学生の自主的な活動を支援するT-ACTの創設10周年を記念する公開シンポジウムが、11月27日に総合研究棟Aで行われ、学生や卒業生、教職員など約70人が参加した。シンポではT-ACTのこれまでの成果報告のほか、T-ACTで活動した在学生・卒業生が経験談を発表した。

在学生の発表では、ボードゲームを通じた交流イベントなどを開催する高野大さん（比文4年）が、イベントで参加者が集まらなかったことなど失敗談を紹介。そのうえで「失敗の経験が後の成功につながった」と語った。

またシンポではT-ACTの支援体制の確立に尽力したり、T-ACTで活動した卒業生を含む4人の座談会も行われた。この中で在学中、昼食を食べながらタイ語を学ぶ「サワッディーT-ACT」などの企画を実施した及川直人さん（平成22年度教育学類卒業）は「やりたいことがあれば『とりあえずT-ACTでやってみる』くらいの軽い気持ちが大切」と発言。学生にT-ACTを気楽に利用するよう呼びかけた。

T-ACT推進室長の田中博教授（計算科学研究センター）は「これからもやりたいことがあるが挑戦の勇気が出ない学生を支援していきたい」と話した。また参加した学生は「経験談を聞いて、何かやってみたいと思った」と話した。（益本健太＝人文学類2年、写真も）

座談会に参加する及川さん（左）ら（11月27日、総合研究棟Aで）

訂正とおわび

338号2面の『常陽新聞』新たな再出／「NEWSつくば」ウェブで配信』の記事の中で、NPO法人「NEWSつくば」理事長の坂本栄さんの経歴が「時事通信社元ワシントン支局長、元経済部長」となっていましたが、正しくは「時事通信社元ワシントン特派員、元経済部長」でした。おわびして訂正いたします。

地域と自然保護を考える

シンポに国内外から120人

自然保護と地域社会との関係性について考える国際シンポジウム「地域に根差した自然保護」が11月23日に東京自然保護」が11月23日に東京キャンパス文京校舎（東京都文京区）で開催された。このシンポジウムには、オーストラリアや北海道など国内外から120人が参加した。

同シンポジウムでは初めに、国内や海外の事例をもとに自然保護の現状と課題について発表が行われた。次に、地域住民や団体などが自然保護活動に関わる事例に関する発表があった。その後、保護された自然環境を売りにするエコツーリズムと呼ばれる観光に関する講演も行われた。

また、学生によるポスター発表も行われ、20組が発表した。最後には一般の参加者も交え、自然保護に関する議論が行われた。

シンポジウムを振り返って講演した国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）の柴崎茂光准教授は「制度にとらわれず、自国にあった自然保護の在り方を模索するのが重要だ」と語った。

また、同シンポジウムの学生実行委員を務めた田村知也さん（地球進化4年）は「今回をきっかけに自然保護と地域社会の関係について関心を持ってもらえればうれしい」と話した。（中村瑞歩＝日本語・日本文化学類1年、12面に関連写真）

新型印刷機 問題相次ぐ

学生「印刷が遅い」など訴える

印刷費の高騰により、一部学類で印刷の上限枚数が削減された全学計算機システムの印刷機について、今度は印刷速度の遅れや、印刷物が全て黒くなるなどの問題が出ていることが分かった。同システムを管理する学術情報メディアセンターはウェブサイト上で原因調査へ協力を求めている。今年3月に更新された同システムは、更新と同時に新型印刷機も導入。だが印刷費の高騰を受け、7月から印刷濃度を薄く設定しており、それへの苦情も出ている。（木村誠＝人文学類1年、写真も）

本紙の取材に対し、ある男子学生（社学2年）は「新型になって印刷速度が大幅に遅くなったと感じる。1枚の文書が印刷し終わるまでに約2分かかり、提出時間に間に合わず焦ったこともある」と話す。また別の男子学生（物理3年）は「ある印刷機では用紙全体が真っ黒にしか印刷されず、仕方なく別の印刷機のある教室に移動した」と語っている。

同センターは、11月20日からウェブサイトに「印刷が遅い・印刷結果の用紙全体が黒く出力される場合の原因調査にご協力ください」と学生向けに公表。現在、2つの不具合について原因の調査を行っているという。

一方、印刷できないトラブルも発生している。ある男子学生（人文1年）は本紙に「中央図書館の印刷機では、印刷開始ボタンを押しても反応せず、印刷できないことが数回あった」と話す。

新型印刷機は導入以降、問題が相次いでいる（12月3日、1D棟で）

同システムの印刷機については、更新後に印刷費用が従来の2・6倍に高騰。これを受けた社会学類など5学類では、学生1人あたりの印刷上限枚数が最大で従来の半分まで削減されていた。

この高騰に対応するため、同センターでは7月から全ての印刷機で印刷濃度を従来より薄く設定している。だが、印刷機をよく利用しているという男子学生（社学3年）は「本来は黒色の文字が灰色のように見え、印刷不備だと誤解される。レポートなどの提出物はコンビニで印刷している」と語った。

イオン閉店

学生への影響大きく

大学の支援充実を

記者の目

【1面参照】「イオンつくば駅前店」の閉店による筑波大学生への影響は計り知れない。同店は毎年4月の学生宿舎入居日の前後に、学生用に同店と宿舎を結ぶ無料送迎バスを運行。「新生活応援セール」を行い、食料品や日用品、家具や家電などの生活財を販売してきた。このセールでは、購入物がたとえタオル1枚でも、宿舎などに当日無料配送。また、同店の自転車コーナーの店員によると、例年入学式の時期には自転車100台ほどが学生宿舎やアパートに当日配送されたという。

家具などが購入できる大型商業施設は、研究学園駅周辺などにもあるが、経験から言って同店ほどサービスが充実した店は少ない。新入生にとって、同店の存在は欠かせなかった。

筑波大の場合、大学周辺に住む学生は圧倒的に多い。だが、他の国立大などと違い、生活協同組合がない筑波大では、民間業者の動向によって学生生活が左右されやすい。平砂学生宿舎の北側には来年10月にも商業施設ができる見通しだが、これを含め長期的な展望に立った学生生活の支援を大学に期待したい。（秋田耕平）

広告欄

筑波大学新聞
●連絡先が統一されました
◆電話・FAX
029-853-6699
◆メール
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
●学内外で無料配布中
筑波大学新聞を置いていただける場所を学内外問わず募集しています。電話やメールでお気軽にご連絡ください。

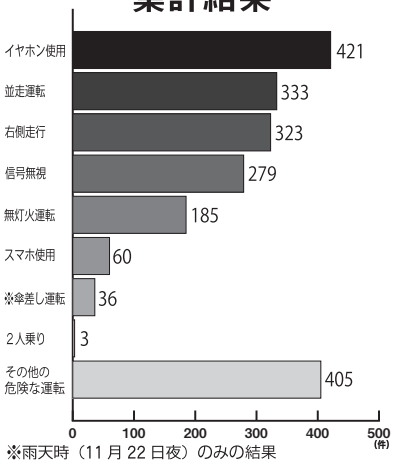
約6200人を調査

自転車の交通違反多発

筑波大学生にとって自転車は学内の移動に必須の存在だ。だが、その乗り方のマナーは問題の種だった。「筑波大生のマナーは最悪。授業で教えられないのか」。大学にはこんな苦情が寄せられる。今回、学外の2地点で5311人を調査する一方で、学内の1地点で928人を調査。近隣からの苦情も調べた。（木村誠＝人文学類、豊岡恵＝比較文化学類、橋野朝奈＝日本語・日本文化学類、小宮山瑛生＝社会学類、竹添そら＝知識情報・図書館学類）

調査結果

学外で調査した5311人のうち、違反とみられる危険な運転は2045件だった。最多はイヤホンなどで音楽を聴きながらの運転で421件。また、並走運転も多く333件で、中には4人で並んで走行するケースも見られた。その他の危険な運転の件数は405件で、そのうちほとんどがポケットに手を入れた運転だった。このほかにも▽片手に荷物を持つ▽両手を離す▽道路の中央を走行▽蛇行運転……などが自転車同士が衝突する現場を目撃した。



※雨天時（11月22日夜）のみの結果

◆調査方法

11月20－24日、記者11人が午前8～9時、午前11時30分～午後0時30分、午後6時～7時の間、学外で道路交通法の対象となる天久保3丁目16の8のローソン前の交差点と、同丁目4の1のミニストップ前の「平塚線中央」交差点の計2カ所で調査。また、11月22日の午前11時30分～午後0時30分に学内の松美池前のペデストリアンデッキ上でも調査した。

調査対象は、自転車の総通行数と、交通違反とみられる自転車数の2項目だった。

交通違反の基準は、道路交通法の中で「危険運転」に指定された14項目を参考に作成したもので、以下の通り。▽信号無視▽路側帯や歩道のない道路の右側を走行▽無灯火運転▽傘差し運転▽イヤホンなどを着けて運転▽スマートフォンなどを操作しながら運転▽並走運転▽2人乗り運転▽その他の危険な運転。なお、その他の危険な運転では▽片手に荷物を持つ▽ポケットに手を入れている▽両手を離している▽道路の中央を走行▽蛇行運転……などを確認した。

走行中のイヤホン着用多数

928人中241件で、このうちイヤホンなどをしながら100件、友人と会話しながらの並走が76件という結果だった。

■調査中には衝突事故も

11月24日の午後0時ごろ、ミニストップ（つくば市天久保）前の交差点で調査を担当した記者は、自転車同士が衝突する現場を目撃した。

スマートフォンを見ながら走行する自転車と対向する自転車が正面衝突し、スマートフォンを手にしていた学生は転倒した。けがはなかったようだが、一歩間違えれば大惨事につながる事故だった。自転車の危険さを感じた。

学内

筑波大生の自転車マナーについて、学生生活課に話を聞いた。

同課によると、筑波大生の自転車マナーについては、教職員や学生、近隣住民や関東鉄道バスなどからの苦情が絶えず、特に「無灯火」「並列走行」「斜め横断」への苦情が多い。

これに対し、同課では年に数回、学生へ街頭指導などを行い安全運転や交通マナーについて呼びかけている。特に毎年10月の自転車交通安全講習会では、つくば中央署の交通課長やつくば市の交通安全指導員らが、交通マナーや学内の自転車問題を話すが、参加学生は約50人だけ。同課は学生の参加を呼びかけている。

同課では学生が安全に学内を自転車で走行できる環境づくりを行っても いる。その一つが渋滞の緩和だ。

学内ではペデストリアンデッキ上など、自転車の渋滞が起きやすい場所がいくつかある。その代表は中央図書館前と大学会館前付近だが、渋滞緩和や事故防止のため、同課は今年10月、自転車の動線を表す矢印を5㍍から10㍍にする作業を実施。自転車の動線を明確にした。また同課では交通量の多い場所では付近の駐輪スペースを削減。通路を拡大し、駐輪スペースを別の場所に移動させる試みを行なっている。

だが、新たに駐輪禁止にした場所に駐輪するケースが後を絶たず、通路の確保は難しいままだ。同課では看板設置などを行い続けるが、この経費は、自転車・バイクの登録制度「ICycle」＝9＝の登録費用が使われているという。

同課の担当者は、「事故にあったり誰かにけがをさせる可能性を常に考え、当事者意識を持って安全運転を心がけてほしい」と話している。

9 ICycle＝迷惑駐輪や放置自転車をなくすことを目的に2013年10月から導入されている自転車・バイクの登録制度。学内で自転車等を駐輪するすべての学生、教員などが対象で、車両1台につき1枚2000円のICタグを貼ることが義務付けられている。

自転車マナーの苦情相次ぐ

（上）駐輪禁止場所に停められた自転車（下）太くなった矢印（12月5日、筑波大学内で）＝橋野朝奈撮影

学生の声

筑波大生の自転車マナーについて学生はどのように感じているのか。歩行者、自動車・バイク利用者、自転車利用者に「ヒヤリとした体験」を聞いた。

★歩行者のヒヤリ

夜間に、無灯火でスマートフォンを操作しながら走る自転車に恐怖を覚えた（比文1年）／ペデストリアン上を非常に速い速度で走る自転車が多く、怖い。無理に歩行者を追い越す自転車も多い（社学1年）／自転車が交差点で信号無視で飛び出してきたことがあり、事故が起きるとヒヤッとした（物理3年）／車道を無灯火で逆走する自転車が、道路を横断する自分の存在に気づかずひかれそうになった（知識図書1年）。

★車のヒヤリ

夜間に車を運転中、スマートフォンを操作しながら走る自転車が蛇行運転をしており、接触しそうになった（人文1年）。

★バイクではけが

原付きバイク運転中に、マンションの駐車場から急に道路に飛び出した自転車を避けようと急ハンドルを切り転倒し、全治2週間のけがを負った（社学2年）。

★自転車同士のヒヤリ

雨の日はよくある自転車が傘差し運転で怖い。衝突しそうになったことや、自転車の傘にぶつかりそうになったことが何度もある（人文1年）／前を走る自転車が後方確認せず、急に右折をしぶつかりそうになった（比文1年）。

（左）夜間に無灯火で走行する自転車（右）イヤホンを着用して走行する自転車（12月5、6日、つくば市天久保で）＝小宮山瑛生撮影 ※画像は一部加工しています

視点

学生は違反行為の認識を

今回の学外での5311人の調査で2045件の交通違反をしている可能性が出た。調査をして感じたのは、交通違反が当たり前になっている現状だ。例えば、最も多かったイヤホンを着けながらの走行。ある学生は「普段からイヤホンを着けて走る。いつも通う道なので、大丈夫だと思っていた」と話した。

だが、イヤホンを着用しての走行は危険なだけでなく、道路交通法で危険運転と定められている。同法は2015年6月に改正され、自転車の危険運転を3年間のうち2回以上摘発された場合、安全講習の受講が義務付けられるようになった。

また、道路交通法には細かい罰則や規定などを各都道府県が定める道路交通法施行細則があり、茨城県ではイヤホンを使用しながらの走行について、「安全な運転に必要な音又は声が聞こえないような状態」の場合、5万円以下の罰金科している。

自らの運転が違反行為なのにそれを認識していない学生が多いのではないだろうか。

また、違反者数の多さは、自分の交通違反が、事故につながるとは考えない人が多いことを物語っているようにも思う。だが、警視庁の発表では16年に発生した交通事故件数は49万9201件で、そのうち自転車が関わるものは9万8836件と約2割。自転車の絡む事故件数は決して少なくないことを意識すべきだ。

自転車は道路交通法では「軽車両」に分類される。車と違って免許制度がなく、利用者の安全への意識は低くなりやすい。しかし、上述の自転車が関わる事故約9万件の中で、死亡事故は509件に上る。

「まさか自分が……」。事故を起こしてからそう言っても誰も助けてはくれない。常日頃からの安全意識だけが、自分を守ってくれる。（小宮山瑛生）

記者の声

越智小夏

筑波大学は10月、LGBTなど性的少数者に関するガイドライン制定などが評価され、性的少数者の支援を行う任意団体「work with pride」が出す最高評価のGOLDを受賞した。同賞は過去、大手企業などに与えられており、大学としては初の快挙だ。だが私の周りでは、いまだに性的少数者への誤った認識が後を絶たないのも事実だ。受賞を機に、学生や教職員の根本的な意識変革を求めたい。

性的少数者

自分にできること考えて
周囲の人の意識改革を

LGBTとはL（レズビアン・女性の同性愛者）、G（ゲイ・男性の同性愛者）、B（バイセクシャル・両性愛者）、そしてT（トランスジェンダー・主に生まれた時の性に違和感のある人）を意味する。

最近のことだ。ある教員と話していたところ「GとTは同じではないか」と聞かれ、驚いたことがある。聞くと教員はトランスジェンダーのことを男性だけのことと誤解していたうえ「男性が好きだから女性への性転換を行った人」と理解していた。

L、G、Bは性的指向を表すが、Tは性の「自認」を表す。簡単に言えば、例えばL、Gの場合は、自分が認識した性と同じ性を好きになる。一方でTの場合、自分の体の性に違和感を持ち、誰を好きになるかは関係がない。教員の言葉に「LGBT」や「性的少数者」という言葉だけが先行し、誤解の一端を見た思いがした。

「LGBT」や「性的少数者」という言葉が日本で一気に広まったのは2015年だ。同年、米国で同性婚を認める連邦最高裁判決があり、渋谷区では同性パートナーシップ条例（婚姻に準ずる関係を認める条例）が施行された。

その後、例えば今年5月に行われた性的少数者やその支援者が参加する「東京レインボープライド」には、2日間でのべ10万人が参加。性的少数者への取り組みを行う自治体も徐々に増え、12月現在、全国で6自治体が、同性間のパートナーシップを認める制度を始めている。

このような中、大学での意識改革を進めるためには、研修会など正規の場で、正しい知識を得ることが必要だと思う。私の友人で、やはり性的少数者の人がいるが、その人はこんな話をしてくれた。

「自分は同性愛者だと親友にカミングアウトしたら、その時は戸惑われたが、翌日、同性愛について勉強したと言ってくれた。とてもうれしかった」

幸い、筑波大は今年度末に向けて、性的少数者へのガイドラインを改訂する予定だ。その中では、事例ごとに学生や教職員など周囲の人が、どう行動すればよいかについて説明される。またカミングアウトされた場合などに自分にほどのような対応ができるか、自分で考える欄も追加される。

これを学内の意識変革のための、いい契機にしたい。

（比較文化学類2年）

筑波時評

米移民政策

トランプ政権で揺らぐ方針
移民二世に未来ある決定を

佐藤千登勢　教授（アメリカ史）

人文社会系・教授。一橋大学大学院、デューク大学大学院博士課程修了。博士（歴史学）。筑波大学大学院人文社会科学研究科准教授などを経て、2015年より現職。

ドナルド・トランプが、米大統領選挙で勝利してから、早くも1年以上が経過した。メキシコとの国境に壁を建設するという公約が象徴しているように、移民に対する規制の強化、なかでも不法に米国へ入国する移民を厳しく取り締まることが、現政権の重要な政策課題となっている。

今日、米国には、いわゆる非合法移民が1100万人ほどいるとされている。この数は、人口の3・4％に相当し、6割以上がメキシコからの移民である。非合法移民の多くは配偶者や子どもと一緒に何年も米国に居住し、外見上、普通の米国人と変わらない生活を送っている。

現在、社会問題になっているのは、親が非合法移民で、幼い時に親に連れられて渡米した子どもたちの処遇である。米国では、在留許可がない子どもでも、小学校から高校まで教育を受ける権利が保障されており、高校卒業後、大学進学を希望する者も少なくない。しかし、家が貧しく学費を工面できない、奨学金に応募することができない、不法滞在のためアルバイトをしながら大学へ通うことができないといった困難に直面している。

こうした状況を鑑み、カリフォルニア州など非合法移民が多い州では、州の居住者が授業料として支払う額と同じ額で、州内に住む非合法移民も州立大学へ行くことができるようにしている。カリフォルニア大学では、年間30名ほどがこの制度を利用しており、非合法移民の若者に大学教育を受ける機会を与えることで、社会の底辺層の拡大をくい止めることができると考えられている。

連邦レベルでは、入国時に15歳以下で、親に連れられて米国へ不法入国した若者に対して、一定の条件を満たせば大学進学や就労を許可し、強制送還を免除するDACA（Deferred Action for Childhood Arrivals）という大統領令が2012年に出された。オバマ前大統領は、2010年にドリーム法（Development, Relief, and Education for Alien Minors: DREAM）という移民制度改革法を成立させようとしたが、連邦議会で可決されなかったため、こうした措置をとった。

それに対し、かねてから「ドリーマー」の優遇に異を唱えてきたトランプ大統領は、今年9月にDACAを撤廃することを宣言した。これが実行に移されれば、約80万人の若者が親の母国へ強制送還される可能性が出てくるため、非合法移民や移民団体などから反対の声があがっている。

米国の移民政策は、その時々の政治状況によって大きく左右されるのが常であり、「ドリーマー」の処遇もその例外ではない。非合法移民をめぐる問題は、入国管理や労働といった領域を超えて、将来のある若者の人生を左右する局面に至っており、「多からなる一」という米国の国是が試されている。

反射鏡

校則の必要性とは

10月に大阪府で学校側から生まれつき茶色い髪色を黒く染めることを強制され、不登校になった女子高生が府を相手に訴訟を起こしたことが話題となった。そこで問題視されたのが、あまりにも厳しすぎる校則だ。筑波大学生は出身校でどのような校則を経験し、校則をどう考えていたのか。春日エリアや第二・三エリア前で聞いた。（豊岡恵＝比較文化学類1年、南圭＝教育学類1年、竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

【体育4年・男性】

校則は髪型の指定がないなら、学生自身にゆだねている部分が多かった。実際に、染色している人などは少なく学生自身で自律した学生活ができていたと思う。校則は学生たちを乱れないよう統制するものだから、一概にこの校則がいいなど、学生自身にゆだねろ、ということは難しいと思う。

【人文3年・男性】

自分はそれほど校則を意識した学生生活をしていたわけではないが、それほど厳しくなかった。周りの生徒は厳しいと言っていたが、慣れればそれほど厳しいものではないと思う。校則は学校の状況に合わせて、学生生活を快適なものにするためのルールであると学生と教師の両者が理解することが重要だ。

【教育1年・男性】

アルバイト禁止などはあったがそれほど厳しくなく、染色や身だしなみのチェックもなくむしろ緩かったと思う。厳しすぎると生徒が感じる校則については、生徒自身たちでその理由を教師に確認できるシステムが求められる。はっきりとした理由がないまま続いている校則は改めるべき。

【修教1年・女性】

中学の校則は厳しく、女子の髪ゴムの色まで指定されていた。校則には、社会に出る前の生徒たちに規律を教えるという役目があると思う。ある程度の厳しさは必要ではないか。

【心理2年・女性】

高校の校則はそれほど厳しいと感じなかったが、中学校のひざ掛け禁止の校則は理不尽だと感じた。校則そのものは学校の管理などで必要だとは思うが、厳しすぎる校則があれば、生徒自身がそれを変えていく努力が必要。それをしてもだめなら校則を破るのも手段としてある。

【社学4年・男性】

校則は、定められてはいたが、校風が自由だったため、「常識の範囲内で行動しましょう」という雰囲気だった。時代や社会状況が変われば、それに合わせてルールを変えることは当然校生は自律を促されるべき年齢でもあると思うので、厳しすぎる校則は不要ではないか。

【比文1年・女性】

染髪・ピアス禁止の高校出身で、不定期の風紀検査があった。社会から見てその場に相応しくない、と思われるような服装は規制すべきだと思う。しかし、高校生は自律を促されるべきだとは思うが、校則は自律のことだし、それは校則でも同じことだと思う。

【知識図書1年・女性】

私の通っていた女子高では、ラッパ飲みがはしたないという理由でペットボトル飲料の持ち込みが禁止だった。その他にも学校のイメージを崩さないための校則があったが、当時はそれが当たり前だと思っていた。今考えると少しやりすぎだったのではないかと思う。

好きな映画

映画産業団体連合会は毎年12月1日を「映画の日」と定めている。これは1896年に日本で初めて映画が一般公開されたことを記念したものだ。当時の映画は「キネトスコープ」と呼ばれる装置を用いて映像を1人ずつのぞき込むものだった。あれから約120年。筑波大学生はどんな映画を見ているのだろうか。好きな映画について、中央図書館前や体育・芸術エリアなどで聞いた。（豊岡恵＝比較文化学類1年、益本健太＝人文学類2年）

【芸専1年・女性】

細田守監督の『サマーウォーズ』。世界中の人々がインターネット上の仮想世界で交流するという独特の世界観が気に入っている。言葉では表せないほど好きな映画で、これまでに50回以上は見た。

【国総1年・女性】

リチャード・カーティス監督の『ラブ・アクチュアリ』。クリスマスの5週間前から始まる数組の男女のラブストーリーが描かれている。母国の違う男女が、言語の壁を乗り越えて愛を伝える冒頭のラストシーンに感動した。クリスマスが近づくと見たくなる。

【生資1年・男性】

マイケル・ベイ監督のアルマゲドン』。さまざまなジャンルの映画を見るが、その中でも最も好き。地球の危機を救った男達が帰還するラストシーンが特に気に入っており、あのラストシーンあってのアルマゲドンだと思う。

【人文2年・男性】

樋口真嗣監督の『シン・ゴジラ』。先月、地上波で初放送されていたため見た。『新世紀エヴァンゲリオン』の監督である庵野秀明が総監督を務めたと知っていたため期待していたが、予想以上に面白かった。特に、ゴジラが東京を破壊するシーンは衝撃的だった。

イラスト＝長手彩夏（地球学類4年）

【体専3年・男性】

クリント・イーストウッド監督の『インビクタス／負けざる者たち』。ラグビーで人種差別が解消されていく様子が描かれている。スポーツにより人の考えが変わることの可能性を感じ、これを見てスポーツを見る目が変わった。

【国総4年・男性】

オリバー・ストーン監督の『プラトーン』。通っていた幼稚園の先生からベトナム戦争に従軍していた親類の話を聞き、興味を持ったため見た。ベトナム戦争の残酷さがよく分かった。

【人文2年・女性】

片渕須直監督の『この世界の片隅に』。戦争を扱った映画だが、人々の生活に焦点を当てているため印象に残っている。炊事、食事のシーンで心が和んだ。

ダンスで交流図る

7団体が多様な作品披露

筑波大学ダンス部が主催するダンスイベント「Dance Express vol12」が、11月15日に中央体育館ダンス場で行われ、同部や筑波大の舞踊サークル、つくば市内のダンスチームなど計7団体が作品を披露した。

公演は2部構成。第1部は同部の佐藤未曇（みくん）さん（体専1年）が振り付けや演出を手掛けた作品「Sunday」で幕を開けた。赤いドレスを着た3人が、穏やかな曲調に合わせたバレエ特有の動きで女の子の休日の喜びを表現。柔らかく豊かな表情で観客を独自の世界観に引き込んだ。

第1部の最後には、筑波大よさこいソーランサークル断桐舞が登場。「南中ソーラン」や「夢煙火」を披露し、迫力のある踊りで観客を魅了した。

第2部では、筑波大応援部WINSがスペシャルメドレーなど2演目を披露。バンド部員の息の合った演奏に合わせ、チア部員が活気溢れるダンスを披露した。また、リーダー部員が客席に回って観客に手拍子や掛け声を求める場面もあり、会場全体を盛り上げた。

続いてダンス部が「進化とは」を披露。猿の格好をした部員らがセットの岩に登り、手を叩くなど猿特有の動きを取り入れながら踊った。途中、猿の格好をしていた1人が洋服を着て、猿から現代人へ「進化」する。進化した現代人は携帯電話を見ながら踊り、作品の最後には岩から落下する。進化に順応しすぎて周りが見えなくなることへの危険性を表現した。

ダンス部主将の早坂南実さん（同3年）は公演を終えて「今回初めて公演に映像を取り入れ、作品への没入感を高めた。次回も期待してほしい」と話した。

ダンス部は、来年3月17日に自主公演を行う予定。

（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類3年、飯田健介＝社会学類1年）

筑波大生と衆院選

筑波大生429人に調査

【1面参照】本紙では10月の衆院選について、筑波大学生429人にアンケートを実施。学生の半分が棄権する一方で、投票学生の約半数が自民党支持という結果を得た。本紙では選挙当日、筑波大周辺の筑波大生が最も多く住むとみられる地域の投票所（投票者総数約1000人）で、筑波大生150人を割り出し聞き取り調査を行ったが、そこでも学生の自民党支持が明らかになっている。今回のアンケートをもとに、識者への取材や筑波大生と教員による座談会を行い、筑波大生の投票行動を分析した。（石川泰行、前名裕一、森賀遼太＝社会学類、吉永真理＝生物学類）

■アンケート結果

衆院選についての関心は、「関心があった」が148人（34・5％）、「どちらかといえば関心があった」が150人（35％）で、「どちらかといえば関心がなかった」（76人、17・7％）や「関心がなかった」（55人、12・8％）を大きく上回った。この一方で、54・1％は、「支持する」が305人（71・1％）、「支持しない」が97人（22・6％）だった。NHKが1月に全国の18歳以上の男女を対象に実施した世論調査で、安倍内閣を「支持する」が46％、「支持しない」が35％だった結果を踏まえると、筑波大生の安倍内閣支持率が非常に高い結果となった。

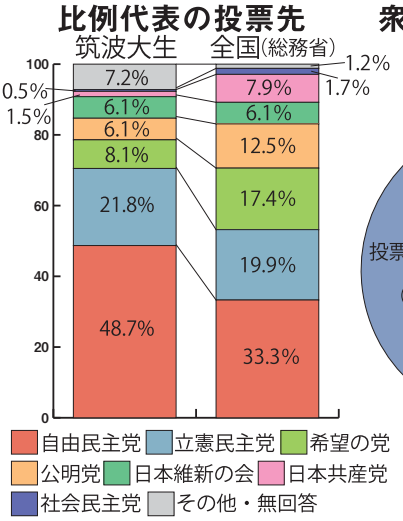
一方、支持しない理由のトップは「安倍首相を信頼できない」が39人（40・2％）、次いで「政策に期待できない」（36人、37・1％）、「これまでの実績が評価できない」（18人、18・6％）だった。

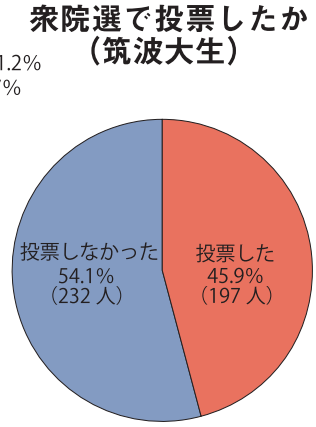
また支持政党では、最多が「なし」（225人、52・4％）、次いで自民党が148人（34・5％）、立憲民主党19人、4・4％）と続いた。

このほか複数回答で「どの政策を重視して投票したかを聞いたところ、「景気・雇用対策」が74人（37・6％）、「憲法改正の是非」（62人、31・5％）、「外交・安全保障」（56人、28・4％）だった。

アンケートでは棄権の理由について、「不在者投票が面倒だったのほか、（不在者投票で必要な）投票用紙の取り寄せが間に合わなかった」などの回答も見られた。不在者投票制度では住民票がある自治体の選挙管理委員会に投票用紙などの書類を請求しなければならないが、請求方法は多くの自治体では郵送。これが「面倒」などの理由につながった可能性がある。

一方、今回の衆院選では、突然の解散の影響で事務手続きなどが間に合わず、中央図書館内の期日前投票所が開設されなかった。そのため、Bivi つくば（つくば市吾妻）やつくば市役所（同市研究学園）などの期日前投票所まで出向いて投票する必要があったが、これを「面倒」と感じた学生もいたことが考えられる。





◆調査方法

11月17－21日に、総合科目などの10の授業で衆院選での投票の有無や投票行動に関するアンケートを実施。設問は選択回答含め13項目。計429人から回答を得た。学群別の内訳は、人文・文化65人、社会・国際112人、人間25人、生命環境83人、理工65人、情報13人、医13人、体育専門33人、芸術専門16人、大学院4人だった。

大学生と政治

全国でも与党支持の傾向

今回の衆院選や本紙が実施したアンケートの結果について、NHK報道局政治部副部長の中田晋也・選挙担当デスクに話を聞いた。（聞き手・前名裕一）

■NHK

――本紙のアンケート結果にどのような印象を持ちましたか。

興味深い結果だと思う。比例代表で自民党に投票した人が半数近く、安倍内閣を支持する人が7割を超えている。比例代表の投票先で自民党を支持した理由と同様に「ほかにいいと思う政党がないから」が最も多い。これは自民党への支持が消極的であり、消去法で自民党を支持している人が多いことを裏付けていると思う。もう1つは、投票しない理由で「不在者投票制度を知らなかった」が最も多いことが注目される。こうした学生の投票率を上げるためには、まずは、各自治体が、これまで以上に、不在者投票制度の周知に取り組むことが求められると思う。

――今回の衆院選の結果や若者の投票行動をどう分析しますか。

選挙直前に民進党が希望の党や立憲民主党に分裂した。そのため、野党への票が分散し、自民党の勝利につながったのではないか。筑波大学新聞のアンケート結果やNHKの出口調査を見ると、若者の自民党への支持率が、ほかの世代よりも高いことは間違いないだろう。NHKの調査では18、19歳が47％、20代では50％が比例代表で自民党に投票していた。それに対し、50代は34％、60代は32％だった。

――若者の自民党支持が浮き彫りになった。若者が自民党を支持する要因は何でしょうか。

（本紙の）アンケートにもあったように、政権運営が安定しており、ほかの政党よりは良いと考えているからだと思う。旧民主党連立政権の時の、事業仕分けを巡る混乱や東日本大震災への対応の遅さを目の当たりにし、今の野党に不信感が芽生えたのではないか。また、現在の景気と雇用の改善も若者が自民党を支持する要因だと考えられる。これは、若者が今の生活に大きな不満を感じていないということなのかもしれない。

――若者の投票率についてはどのような印象を持ちますか。

総務省の調査では、近年、若者の投票率は全体より低い傾向にある。「自民党以外に政権を担える政党がいない」、「どの政党が政権を担っても、それほど生活は変わらない」と考える若者が多いからではないか。

◆中田晋也（なかた・しんや）

山口県出身。早稲田大学卒業後、1994年NHK入局。甲府放送局、報道局政治部、大阪放送局報道部副部長を経て現職。

NHK政治部の中田さん＝本人提供

投票先 自民が最多

安定を求める若者の姿

■識者の声

学生の投票行動や政治姿勢について、若者の行動を研究する土井隆義教授（人社系）に聞いた。（聞き手・森賀遼太）

――NHK調査では他の年代に比べ若者の自民党支持が際立っています。

現在の居場所の不確実性や、将来への漠然とした不安から、安心できる対象を求めているからではないか。

グローバル化の進展や地縁・血縁・社縁の弱体化など、現代では社会の流動性が増し、変化の速度も激しくなっている。それは個人の選択の自由度を高めたが、反面で個人が抱えるリスクも高めた。その最先端にいるのが若者で、このような状況下で少しでも安定した居場所や関係を確保したいと願うようになっている。

このような性向は前世紀の若者には考えられなかった。当時の社会は地縁・血縁・社縁による拘束力がまだ根強く、それを嫌った若者は共同体からの解放と環境の変化を求める性向が強かったからだ。だが現在は逆の性向が強まっている。

自民党支持の高さも、こうした反転現象の一つとしてあるのではないか。これまで長期政権を担ってきた自民党に対して安定感を求めているように思う。

――本紙の調査では、衆院選で投票しなかった学生が半数以上いました。

若者の政治への関心の低さは今に始まったことではない。社会の中でまだ責任ある地位を得ているわけでもなく、日々の生活に投票が直接の影響を与えるとは思いにくい。就活に直結する景気動向には関心があるが、各政党が掲げる経済政策の相違はよく分からず、投票行動にまで至らない。

また、高校までの段階でなるべく政治的関心を持たせないような教育を受けてきたことも要因の一つだろう。かつて学園闘争に象徴される若者の反乱に懲りた政府は、それ以降、若者と政治の距離を保つ教育方針を採ってきた。具体的な政策の賛否を授業で議論させるなど「生の政治」に触れる教育は回避されてきた。

――そうした現状にどう対応すべきでしょうか。

教員には右派も左派もいてよい。皆がそろって中立性の堅持に拘泥するのではなく、学校の中でも自由に議論できるような空気を醸成することが大切だ。

土井教授（11月16日、社会学類長室で）＝越智小夏撮影

検証報道

本紙出口調査 問題なし

■指摘

【筑波大学職員やネットの反応】本紙第338号（11月6日発行）1面の衆院選に関する筑波大生を対象とした出口調査の記事で、150人に調査の上で「筑波大生の7割が自民党公認候補に投票」としたが、対象数が少なく一般化できないのではないか。

■事実経緯

本紙編集部によると、10月22日投開票の衆院選で調査したのは筑波大近くの吾妻中学校の投票所。同投票所は筑波大生が住むアパートや宿舎が密集する天久保、天王台地区が対象で、記者は9人体制で午前9時～午後5時30分まで投票所に来た若者全員にあたり、筑波大生かどうかを確認。数人を除き、確認が取れた150人全員から回答を得た。同投票所の投票者総数は約1000人だった。

■検証

大学周辺で筑波大生が最も多く住む地区の投票所（投票者数1000人）で、当日投票に来たほぼ全員の筑波大生を対象にした調査結果はニュース価値がある。また、今回のアンケート調査では、「筑波大生の7割が安倍政権支持で、半数が自民党比例代表に投票」との調査結果が出ている。（本紙編集代表・福原直樹＝筑波大教授）

◆　◆

「読者に開かれた紙面」を目標に、本紙報道の検証を随時行います。本紙への疑問などがございましたらお寄せください。（本紙編集部の連絡先は1、2面に記載しています。）

座談会「積極的に選挙参加を」

筑波大生は政治に関して、どのような意見を持っているのか。現代日本政治や市民社会を研究する辻中豊教授（人社系）を迎え、河野章哉さん（人文2年）、石飛哲平さん、大場優志さん（社学1年）、相川さくらさん（メ創1年）の4人の学生と座談会を行った。

（中央図書館で吉永真理撮影）

「不在者投票制度の周知を」

①投票したか

相川 投票しなかった。不在者投票も考えたが、手続きが大変で諦めた。

石飛 不在者投票をした。だが、一度出身地の市役所に問い合わせた際に、「（担当者の勧誘いで）できない」と言われるなど手間取った。

辻中教授 「住民票を移すのは国民の義務」という考えもある。しかし、衆院選は地域の代表ではなく、国民の代表を選ぶものなので、住民票を移していなくても投票できるよう柔軟な対応が増えている。ただアンケート結果を見ても不在者投票の制度の周知は十分でないと感じる。

河野 投票は国民の義務だと思うので投票した。だがどの候補者にも期待できなかったため、消去法で選んだ。

辻中教授 投票自体は国民の義務ではなく権利。高校までの教育で、参政権を持つとはどういうことか、学生にきちんと理解させる必要があると感じる。

大場 投票当日に投票に行った。一定数の人が投票に行かないのは関心が無いからだけではなく、投票しても意味がないと感じるからではないか。

辻中教授 若者の投票率低下の原因の一つは、政党間の競争性の低さだ。これは野党の責任が大きい。今回、野党が分裂せず政権選択選挙になっていれば結果は変わっただろう。野党は、より国民の関心を引く努力をすべきだ。

「今の学生は経済政策など現実的な問題に興味を持っていることが分かり、興味深い」と話す辻中教授（右）

「経済政策などに興味」

②重視した政策

大場 外交と安全保障、憲法改正の是非を重視した。憲法の改正案が国会を通過すれば、政治の流れが変わるのではないか。

河野 高等教育や外交政策を重視した。不安な要素が多いため関心がある。

石飛 個人的に興味がある財政再建や社会保障を重視した。

辻中教授 昔の学生は理想やイデオロギーなど、将来を考えて投票していた。だがアンケート結果やみなさんの話から、今の学生は経済政策など現実的な問題に興味を持っていることが分かり、興味深い。

③選挙結果について

相川 学生は景気・雇用対策に関心がある。景気が上昇している現在、自民党を支持する声は大きかったと思う。

石飛 報道では、税金の使い道で現政権が非難されている。だが、（自分は）税金をあまり払っていないので実感がなく、（現政権）不支持の理由にならない。経済も回復しているので、政権が交代して不安定になるより安定している現政権に任せたいと思った。

辻中教授 政治に関心を持ち始めるのは15歳ごろと言われる。今の学生がその年齢のころ、旧民主党連立政権下の日本は東日本大震災などもあり、政治が不安定な印象だった。その時の記憶が、学生が現政権を支持する一因ではないか。

大場 どの政党も支持できない学生が多いと感じる。メディアでは現政権の批判が多いが、学生には現政権を支持するのが普通という風潮がある。

河野 学生がメディアから受ける影響少なくなっていると感じる。

辻中教授 野党のことがよく分からない、というのが学生の本音だろう。また、大人に反抗する学生特有の態度が、現政権を批判するような報道に疑問を抱き、現政権を支持することにつながっているのではないか。

「現政権支持は普通」

「野党は努力が必要」

④今の政治に望むこと

石飛 不在者投票制度を改善するなど、誰もが投票しやすい環境づくりを期待する。

河野 各政党の公約を見ても、結局実行されるのか分からない。

辻中教授 今回の衆院選が不安で選びにくい。

大場 野党が自民党を批判するばかりで政策が見えてこない。野党の明確な政策が知りたい。

相川 自民党の独走のように思える。野党にもっと頑張ってもらいたい。

辻中教授 今回の衆院選の比例代表では自民党の票は野党全体の票よりも少なく、実は自民党はさほど強いとは言えない。憲法改正の国民投票など、（今後）政治が大きく変わる可能性もある。このような局面で、若者は昔よりずっと政治に関心を持っていると感じる。

自由民主主義的な国は世界の国の3分の1程度で、日本のように自由に投票できる国は意外と少ない。若者には積極的に選挙に参加してほしい。

「各政党の公約が実行されるか不安」と話す河野さん（左）ら

■視点

今回の調査では、約半数の学生が、比例代表で自民党に投票し、筑波大生の自民党支持が改めて浮き彫りとなった。だがその理由として「他にいいと思う政党がない」を挙げた学生も多かった。

この原因の一つとして、今回取材した辻中豊教授（人社系）は旧民主党連立政権時代のさまざまな失敗を挙げた同教授によると、人間が政治に関心を持ち始めるのは15歳ごろだ。その上で辻中教授は、今の大学生がそのくらいころは民主党政権で、事業仕分けを巡る混乱や、福島第一原発事故への対応など政権運営が不安定だったことを指摘。辻中教授は「その時の記憶が（自民党や）現政権を支持する一因では」と話す。

また今回取材した土井隆義教授（人社系）は別の要因として、今の若者が変化より安定を好むことを挙げた。土井教授によると、グローバル化で変化が激しくなる中、若者は変化を恐れ、安定を求めるようになった。若者が政権選択に安定を求めるのはこのためではないかと土井教授は分析する。

事実、今回の座談会に参加した石飛哲平さん（社学1年）も「政権が交代して不安定になるより、安定している現政権に任せたい」と話す。

私見で恐縮だが、私も今の野党にはあまり期待していない。それは政権の批判を繰り返すばかりで、将来のビジョンを我々に提供してくれないような気がするからだ。

ただ、政治は移り気だ。一政治家の一失言が、政治の動向を大きく左右してしまうのは、最近の例を出すまでもないだろう。今後も政治動向に着目したい。

（石川奏行）

安定求め自民支持

◆おことわり

「卒業生からの手紙」は休みます。

食品の成分や食感を可視化

「おいしさ」追求し明るい食卓へ

粉川美踏助教

「おいしい」とはどのような感情だろうか。個人差はあるだろうが、それが味そのものだけでなく、匂いや食感など多くの要因に影響されるのは間違いない。

粉川美踏（こかわみと）助教（生環系）は、食感や味覚の一つであるうま味など、「おいしさ」を可視化する研究を行っている。

現在、味や香りといった食品品質の検査は、「官能検査」に多くを頼っている。だが、感覚には個人差があるうえ、疲労などで測定結果が変わる場合がある。官能検査のほかには、目的とする成分を抽出して化学分析を行うこともできるが、この場合、商品からサンプルを抜き出して測定するため、商品全体との数値に違いが出る可能性がある。

そこで粉川助教は食品に光を当てて、食品中の成分を可視化する方法に着目した。物体は光が当たると、一部の波長の光を吸収し、残りを放出する特性を持つ。これを生かすと、食品中の成分が放出した光を見れば食品の成分を検知できる。そして粉川助教はこの光を写せる特殊カメラを使ったのが「食感」を可視化した研究だ。パンの「食感」は小麦粉と水が混ざる過程でできる「グルテン」という成分によって作られる。

そこで、グルテンが放出する光を見ることで、助教はペプチドやアミノ酸が放出する光を計測。肉の種類や部位ごとに熟成に必要な時間を正確に突き止めようと、研究を続ける。

また、この技術を応用し、研究を続けてきた。

その一つが食肉の熟成度の計測だ。

肉は熟成すると香りが良くなり、うま味成分の特徴が際立つが、これは熟成することで、うま味なると、一部の波長の光を吸収し、残りを放出する特性を持つ。これを生かすと、食品中の成分が放出した光を見れば食品の成分を検知できる。そして粉川助教はこの光を写せる特殊カメラを使を持ったペプチドやアミノ酸が増加するためだ。だが肉は、種類によって熟成に必要な期間が異なり、例えば気温4度で貯蔵した場合、豚肉では3日～5日、鶏肉は半日～1日かかる。そこで粉川

催事

Doo-Wop 冬ライブ

2月24日（土）につくばカピオホール（つくば市竹園）で開催される。午後5時30分開場、午後6時開演、午後8時30分終演。

筑波大学アカペラサークルDoo-Wopの公演。サークル内のオーディションを勝ち抜いたバンドによるアカペラライブ。入場は無料。

問い合わせ＝e-mail:dw.winterlive@gmail.com（筑波大学アカペラサークルDoo-Wop）Twitter:dw_winterlive

全日本大学選手権
男女ともに準優勝

コンビネーションが成功し、豪快にスパイクを打ち込む小池（12月3日、早稲田大戦で）＝岡田優太撮影

【大田区総合体育館（東京都大田区）】で佐々木悠里＝人文学類3年、佐藤巧基＝物理学類2年】大学日本一を決める全日本大学選手権が11月27日から12月3日に行われ、筑波大は男女ともに惜しくも準優勝で終わった。井上豪里沙（体専4年）が敢闘賞とベストスコアラー賞、中根聡太（同4年）が敢闘賞とセッター賞を獲得するなど、男女計7人が個人賞に選ばれた。

バレー

■女子

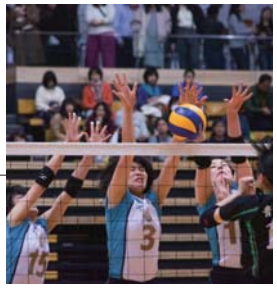
2日の準勝で、前大会王者の鹿屋体育大を3―1で破り、3日の決勝戦へと駒を進めた。

決勝戦の相手は秋季関東大学戦でストレート負けを喫した青山学院大。一進一退の攻防を繰り返すフルセットの末、惜しくも優勝を逃した。

第1セット、筑波大は序盤から粘り強い守備で流れをつくった。中盤にピンチサーバーで交代した鏡原叶悠（同1年）のジャンプフローターサーブで相手の守備を崩し、25―14でセットを先取した。

第2セットは青山学院大のブロックに阻まれ、拮抗した展開に。だが、中盤にリードを許し、1セット目とは打って変わり、相手の粘り強い守備に筑波大が逆にミスを誘われ、22―25でこのセットを落とした。

だが、3セット目には再び粘りのバレーを取り戻した。中盤まで接戦が続いたが、流れを変えたのは丸尾遥香（同3年）のスパイクだった。アタックライン付近にスパイクを叩き込むと、主将の井上の連続サービスエースで筑波大は流れを物にした。その後は鋭いスパイクを量産し、25―16で一気にこのセット上を奪った。



3枚ブロックで相手のスパイクを抑える筑波大（12月3日、青山学院大戦で）＝岡田優太撮影

第4セットでは、試合は拮抗したが、終盤筑波大のスパイクミスが続き、21―25で落とし最終セットへ。

第5セットは序盤からスパイクが拾われ流れをつかまれた。中盤4点を追いかける状況で井上が3連続でスパイクを決め追い上げを見せるも相手に逃げ切られ12―15で優勝を逃した。

中西康二監督（体育系・准教授）は「しぶとくスパイクを拾われ、ブロックは上手くかわされた。セットごとに勢いをつなげられなかった」と話した。井上は「焦って自分たちのミスで点を失ってしまった」と振り返った。

■男子

2日の準決勝で大会3連覇中の中央大と対戦。フルセットに及ぶ大接戦の末、3―2で絶対的王者を破った。

勢いに乗り迎えた決勝では、秋季関東大学戦で優勝した早稲田大と対戦。サーブなどでのミスが目立ち、0―3で敗れた。

第1セットでは、序盤に小池勇輝（同4年）のバックアタックを上手く使い、一進一退の攻防を繰り広げた。だが相手のブロックに捕まり流れをつかまれ、20―25でセットを落とした。

第2セットは、序盤から筑波大のサーブミスが目立ち、早稲田大に主導権を握られた。ブロックでスパイクを任留め始めるも、相手セッター小林光輝（3年）のトス回しでブロックを分散され、21―25でセットを奪われた。

後がない第3セットでは、樋口裕希（同3年）などのスパイクが決まるも相手の守備を崩しきれず、18―25で敗北を喫した。

秋山央監督（体育系・助教）は「連日の疲れが溜まり、いつもより（ボールを）つなげなかった」と話した。主将の中根は、「ミスが多く、自分たちの力を出し切れなかった」と話した。

粘りのバレー実らず

悲願の4連覇ならず
大東文化大に敗れ準優勝

要所でシュートを決めた主将の青木（11月26日、大東文化大戦で）＝明石尚之撮影

バスケ

全日本大学選手権

【青山学院大学青山キャンパス青山学院記念館（東京都渋谷区）で益本健太＝人文学類2年】大学日本一を決める全日本大学選手権が11月20―26日に行われた。筑波大は26日の決勝で大東文化大に68―87で敗北。準優勝で大会を終え、史上2校目の4連覇を逃した。敢闘賞に杉浦佑成（体専4年）、優秀選手賞に増田啓介（同2年）が選ばれた。

準々決勝、準決勝で大接戦を制した筑波大は、決勝で関東大学リーグ戦3位の大東文化大と対戦。第3ピリオドまで拮抗した展開となったが、筑波大は第4ピリオドで大東文化大の猛攻を止められず敗戦した。

序盤から、筑波大は大東文化大の身長202㌢を誇るモッチ・ラミン（2年）の攻撃・リバウンドに苦戦。主将の青木保憲（同4年）らの3Pシュートなどで対抗したが、わずかにリードを許した。第2ピリオドでは、山口颯斗（同1年）のリバウンドから攻撃を組み立て、一時5点のリードを得た。しかし、再び大東文化大に連続得点を許し、38―42と4点のリードを許して前半を終えた。

後半、筑波大は増田と杉浦を中心に反撃。第3ピリオド終了間際には杉浦の3Pシュートで3点差まで追い上げた。第4ピリオドでも、増田と牧隼利（同2年）がファールをもらいながらもシュートを決めるなど大東文化大に食らいついた。しかし、増田が5回目のファールを犯して退場すると、大東文化大の確実なリバウンドとシュートで一気に点差を広げられ、68―87で敗北した。

吉田健司監督（体育系・准教授）は「リバウンドを多く決められてしまった」と悔やんだ。

観戦記

リバウンドで明暗

勝敗を分けたのはリバウンドだった。筑波大の35リバウンドに対し、大東文化大は49リバウンド。筑波大はゴール下で競り負けチャンスを多く与えてしまった。主将の青木保憲（体専4年）は「リバウンドの面でもったいないプレーが多かった」と悔やんだ。

最大の要因はモッチ・ラミン（2年）を抑えきれなかったことだ。筑波大は主

チームトップの16得点を挙げた増田（11月26日、大東文化大戦で）＝明石尚之撮影

将の青木保憲（体育系・准教授）を中心に対応を図ったが、地力の勝るモッチ1人に16リバウンドを許した。吉田健司監督（体育系・准教授）は「どうモッチを抑えるかがポイントだったが空回りしてしまった」と話した。また、木祥護（同3年）

馬場雄大（同4年）がBリーグのアルバルク東京へ入団し、チームを離脱したことも影響した。5月の関東大学選手権でチーム1位の34リバウンドを決めた馬場の不在はゴール下の戦力を下げた。

リバウンドで圧倒され、4連覇を逃した筑波大。しかし、今大会では来年の主座奪還への希望も見えた。

1・2年生の活躍

増田啓介（同2年）、牧隼利（同2年）は全試合スタメンで出場。筑波大の主軸に成長した杉浦佑成（同4年）は「増田と牧が頼りになった」と話した。

さらに、準決勝で決勝点を決める勝負強さを見せた菅原暉（同1年）や決勝の競った場面でリバウンドを複数決めた山口颯斗（同1年）ら、1年生がチームを勢いづけた。「1年生が堂々とプレーしてくれたのは今後の筑波大にとってプラスだ」（青木）

杉浦ら4年生の引退による影響は大きいが、1・2年生の成長は期待以上だ。来年のインカレでは王座に返り咲いてほしい。（益本健太）

日本学生選手権
増澤　2種目で準優勝

オリエンテーリング

学生日本一を決める日本学生選手権が、11月11、12日に岐阜県関ケ原町などで開催され、筑波大の増澤すず（比文2年）が、スプリント部門とロング部門の2部門で準優勝を果たした。

オリエンテーリングは、山野に設置されたポイントを、地図とコンパスを用いながら順番に通過する競技。今大会では、約3㌔の道のりを走るスプリント部門と、約6㌔のロングディスタンス部門が行われた。

今大会のスプリント部門は、インカレでは初となる市街地で行われた。山地を走る通常の会場に比べ平易で、速さが出せるコース。増澤は中盤に小さなミスをするも、後半は持ち前の俊足を生かし14分ちょうどで2位でゴールした。

ロングディスタンス部門では、増澤は序盤に小さなミスをしたことで、焦りから地図を読み間違い、勝負となる4番目から5番目のポイントにかけての長いコースで遠回りをしてしまった。後半は慎重にコースを取り、58分37秒でゴールし、2位になった。

増澤は「2種目も準優勝できて驚いた。地図をより早く正確に読み、一番良い道順を見つけられるようになりたい」と話した。（越智小夏、12面に関連写真）

広告欄

関東大学リーグ 史上最高成績で優勝

【味の素フィールド西が丘（東京都北区）で飯田健介＝社会学類1年、写真も】

4月から行われていた関東大学リーグが11月19日、閉幕した。前期を1位で折り返した筑波大は後期でもその強さを見せ、年間成績を17勝3分2敗とし、歴代最多勝利・最多勝ち点で、13年ぶり15回目の優勝を果たした。また、中野誠也（体専4年）が得点王、戸嶋祥郎（同4年）がMVPを獲得するなど、計8人が個人賞を獲得した。

サッカー

19日には順天堂大とのリーグ最終戦が行われた。この時点で筑波大はリーグ優勝を決めていたものの、1位と2位による注目の一戦となった。前半10分、相手選手に中央突破を許し、ペナルティーエリアの外からゴールを決められた。追いつきたい筑波大は中野を中心に攻撃を組み立てるも、なかなかゴールが奪えない。だが、43分、ついに筑波大がチャンスを物にした。三笘薫（同2年）が左サイドをドリブル突破しシュート。一度は相手キーパーに止められたが、そのこぼれ球に西澤健太（同3年）が反応し、同点に追いついた。勢いに乗った筑波大は、44分、西澤の右コーナーキックを鈴木大誠（同3年）が頭で合わせ逆転、前半を2−1で折り返した。

このまま試合を有利に進めたい筑波大だったが、後半9分、順天堂大がスルーパスから抜け出し、キーパーとの一対一を決められ同点とされた。

その後は両チーム得点を奪えない拮抗した展開となった。だが、33分、右サイドを抜け出した途中出場の松村遼（同4年）がゴール前の西澤にラストパス、ペナルティーエリア外からミドルシュートを放ち、この日2点目を決めた。このまま試合は終了し、筑波大が3−2で勝利した。

小井土正亮監督（体育系・助教）は、「点を取られても選手は慌てなかった。最終的に自分たちの流れに持って行けたところにチームと選手一人ひとりの成長を感じた」と語った。

この結果を受け筑波大は12月に行われる全日本大学選手権への出場を決めた。

ディフェンスを振り切り、シュートを打つ中野（11月19日、順天堂大戦で）

梶原 W杯団体銅メダル

トラックレースの世界大会であるUCIトラックワールドカップ第9戦が11月10−12日にマンチェスター（イギリス）で開催された。女子チームパーシュート（団体追い抜き）で梶原悠未（体専2年）を含む日本チームが予選で4分27秒329という日本新記録を出し、銅メダルを獲得した。今まで予選を通過することすら困難だった日本は、今大会で歴史的快挙を果たした。（佐藤巧基、1面に関連記事）

コーナーを激走する梶原（左）（11月12日（現地時間）、マンチェスターで）＝本人提供

自転車

団体追い抜きは4人1チームで250㍍トラックを2チームが16周走り、チームで3番目にゴールした選手のタイムで勝敗を競う。

予選では日本記録を7秒以上更新し、12チーム中3位で1回戦に進んだ。1回戦では世界ランク1位のイタリアに挑み、約3秒差で敗れたが、タイムが全体の3位だったため、3位決定戦に駒を進めた。

3位決定戦ではドイツと対戦。団体追抜きは4人が一列に並び、空気抵抗が大きい先頭を変えながらトラックを周回する。先頭交代のタイミングや、いかに3番目の選手を早くゴールさせるかなどの作戦が重要となる。

梶原は、試合開始時は2番目に付き、1周半周後に先頭と入れ替わった。開始直後は加速度が大きく、速度を落とさないようにペースを作ることが困難だが、完璧にペースを落とさずに入れ替わりを成功させた。そしてチームで最も長い5周半の間、エースとして先頭で集団を最適なペース配分で走り切り、ドイツを破り表彰台に立った。

梶原は「世界で戦えるレベルに追いつき、東京五輪のスタートラインに立てた。これからも努力を重ねたい」と話した。

野球

OBの寺田 ドラフト6位

10月26日に行われたプロ野球ドラフト会議で、寺田光輝（石川ミリオンスターズ・平成27年度体育専門学群卒）が横浜DeNAベイスターズから6位指名を受けた。筑波大出身者のプロ指名は9年ぶり7人目。

硬式野球部の川村卓監督（体育系・准教授）は「大学時代は肘のけがの影響であまり登板できなかったが、独立リーグでの努力が認められた。チームの即戦力となるよう、期待している」と話した。

（前名裕一＝社会学類3年）

柔道

講道館杯 グランドスラム 津金が3位 佐々木が優勝

【千葉ポートアリーナ（千葉市中央区）で池田花於里＝比較文化学類1年、写真も】

体重別日本一が決まる講道館杯が11月11、12日に行われ、男子81㌔級で佐々木健志（体専3年）が優勝、73㌔級で野上廉太郎（同1年）が準優勝、66㌔級で田川兼三（同3年）が準優勝した。女子は入賞者は出なかった。また、12月2、3日に東京体育館（東京都渋谷区）でグランドスラムが行われ、筑波大からの佐々木、野上、田川、津金の4人が出場し、野上が男子73㌔級で5位、津金が女子63㌔級で3位に輝いた。

■講道館杯

11日千葉ポートアリーナ（千葉市中央区）で開催された男子81㌔級では、佐々木が得意の寝技で流れをつかみ、初戦と準々決勝で一本勝ちを収めた。決勝では、小原拳哉（パーク24）と対戦。開始36秒で相手にかけられた内股をかわして寝技に誘い込み、45秒で腕挫十字固（うでひしぎじゅうじがため）で一本を奪った。新主将として好スタートを切った佐々木は「武器の寝技を生かせた。主将として、来年は各大会で団体優勝を狙いたい」と語った。

12日の女子63㌔級では、津金恵（同4年）がシードで出場し反則勝ちや技ありで粘るも、準決勝で田代未来（コマツ）に内股で一本を取られ敗退。津金は「攻めが甘かった。今回の経験を次につなげたい」と話した。

■グランドスラム東京

12月2日に東京体育館（東京都渋谷区）で行われた女子63㌔級、津金は準々決勝で世界ランク1位のトルステニャ（スロベニア）に苦戦し、延長3分過ぎに反則負けとなった。その後の3位決定戦では、世界ランクで格上のプランセン（オランダ）を相手に開始約40秒で技ありを奪い優勢勝ち。2012年の優勝以来、今大会において5年ぶりのメダルを獲得した。

技を狙う津金（右）（11月12日、講道館杯で）

顔

自慢の俊足で流れ変える

4月から行われた関東大学春季大会の第3戦、関東学院大戦で1年ながらスタメンに抜擢されてから、チームの主力として活躍。関東大学対抗戦の明治大戦では、相手の死角に抜け出す鮮やかなトライを見せ、2トライを決めた。2年連続で大学選手権進出を逃した筑波大ラグビー部の復活を担う次期エースと期待される。

ポジションはウイング。華麗なステップと圧倒的なスピードで相手を抜き去り、ゴールラインまでボールを運ぶ役割から「フィニッシャー」とも呼ばれる。50㍍6秒0の俊足もさることながら、古川拓生監督（体育系・准教授）は「1対1でも抜かれない力を持っている」と評価する。

岡山県出身。小学2年生の時に近所の友達に岡山ラグビースクールに誘われ、競技を始めた。中学校ではクラブチームの練習の傍ら、スタミナ強化やキック力の向上を求め、サッカー部に所属。平日はサッカー、土日はラグビースクールで汗を流した。だが、全国クラブ大会では、予選の中国・四国ブロックを一度も突破できずに終わった。

「高校は強いチームで戦いたい」と、地元を離れ島根県の強豪・石見智翠館高校に入学。入学当初からスタメンに定着するも、上級生への遠慮から、部内では自分の思うようなプレーができなかった。

転機となったのは高校2年生の夏、U−17日本代表に初選出された。「選んでもらったことで、努力が結果として表れたと感じた。大会は3戦3勝で自身も4トライを決め、自信を身につけた。

そして、2年生の全国高校大会（花園）では、準々決勝で自慢の俊足を遺憾無く発揮。劣勢だったチームの流れを変える走りを見せ、チームを島根県勢初のベスト4に導いた。

しかし3年時には苦渋を味わった。U−18日本代表の候補まで選ばれながらも落選。部の副将（にくま）としてチームを引っ張った花園でも去年の成績を越えられず、ベスト8で大会を終えた。「このままでは終われない。もっと強くなりたい」と大学でのリベンジを誓った。

「将来を見据え、寮生活ではなく一人暮らしの環境で頑張りたい」と筑波大に進学した。大学ラグビーは、高校に比べ体格差があり競技レベルが上がる。そのため抜け出せるスペースが狭く、入学当初は特に苦戦したという。突破するための当たり負けしない体作りやスピードの向上、的確なポジション取りなどはまだまだ課題だ。

来年に向けての目標は明確だ。「試合中のコミュニケーションでも、そしてプレーでも流れを持っていける選手になりたい」。長年筑波大の主力として活躍してきた4年生が抜け、来年はスタメンが大きく変わる。試合経験が豊富な数少ないメンバーとして、1年生ながら次のチームを引っ張る責任感は強い。また、2019年ワールドカップ日本代表へとつながるU−20日本代表入りを目指す。

低迷を打破する起爆剤として、筑波のルーキーは勝利に向かって走り続ける。（明石尚之＝体育専門学群2年、写真も）

ラグビー部復権を担う次期エース

仁熊秀斗（体専1年）

第43回雙峰祭

「筑波日和」テーマの3日間

第43回筑波大学学園祭（雙峰祭）が11月3－5日に行われ、学生団体の模擬店や演舞、教員による講演会など300以上の企画でにぎわった。今年のテーマは「筑波日和」。筑波大生が内に秘める力を存分に発揮し、雙峰祭が日常と異なる筑波大の魅力を味わえる「筑波日和」になってほしい、という思いが込められた。「筑波日和」で特に盛り上がった3企画を取材した。

（池田花笠里、柏このか＝比較文化学類1年、木村誠　12面に関連写真）

男女7人の個性際立つ

つくコレ

今年の「ミスキャンパス」「ミスターキャンパス」を決める「TSUKUBA COLLECTION 2017（つくコレ）」には、ミス部門に3人、ミスター部門に4人が立候補。石の広場の「UNITED ステージ」で行われた3日の前夜祭では、それぞれが特技などを披露し、魅力をアピールした。

この中で江永夢叶（ゆめか）さん（社会専2年）はアニメ「おジャ魔女どれみ」の主題歌を歌い、峰岸真央（まお）さん（医学6年）はお笑い芸人、サンシャイン池崎さんのものまねを披露。また、ミス部門とミスター部門の出場者がペアになり、事前のお題に沿って劇をする企画もあり、個性的な演技が会場を沸かせた。

この結果、5日に同ステージで観客らによる投票結果が発表され、ミスに江永さん、ミスターに峰岸さんが輝いた。江永さんは「周りからの応援の一つひとつがうれしく、ほかでは味わえない経験になった」と話した。また、峰岸さんは「応援してくれる人に恩返しがしたかったので優勝できて良かった。楽しい思い出を作れた」と話していた。

来場した女子学生は「江永さんのことを応援していたので優勝しうれしい。つくコレを通して出場者の魅力が分かった。来年も見たい」と話していた。

つくコレでは出場者の趣味、特技などのプロフィールや、写真などを事前に8月以降、ネットで紹介。投票は、9月29日からネットでも行われたほか、学園祭期間中に中央図書館前でも行われた。

「ミスキャンパス」に選ばれた江永さん（11月3日、石の広場で）＝木村誠撮影

「ミスターキャンパス」に輝いた峰岸さん（11月5日、石の広場で）＝木村誠撮影

6団体が演技を披露

前夜祭

3日、石の広場に設置された「UNITEDステージ」で前夜祭オープニングセレモニーが開催された。まず司会の2人がステージに登場し、開祭を宣言。午後6時からは、「筑波大学斬桐舞」、「筑波大学アカペラサークルDoo-Wop」、「筑波大学体操部」、「筑波大学落語研究会」、「ツクライブ！」、「筑波大学クルダッチサークルpurplume」の6団体が演技を披露した。「筑波大学斬桐舞」は力強い掛け声と共に完成度の高いよさこいを演舞。また、4年ぶりに参加した「筑波大学体操部」は「鳥」をテーマに迫力のある組体操を披露。曲に合わせた滑らかな組技に会場から歓声が上がった。ステージを見た学生は「高度な組技に驚いた。テーマのように鳥が舞っているようだった」と話した。

その後、今年初の企画として「つくバラエティー」が行われた。参加した5チームは優勝をかけ、つくば市や筑波大に関するクイズや大喜利を競い、観客の笑いを誘った。最後には「TSUKUBA COLLECTION 2017」の出場者の紹介や一芸披露などが行われ、会場は大いに盛り上がった。

組技で鳥を表現する体操部（11月3日、石の広場で）＝木村誠撮影

社学生が松美池を疾走

松美記念

5日、社会学類の学生が馬やその年の話題の人などに扮して松美池で競走する「第21回松美記念」が開催され、約400人が足を運んだ。

松美記念ではまず、1年生が出走する「新馬戦」が行われ、その後、新馬戦の1着と、有名人などに仮装した2、3年生の複数の組が争う「本馬戦」が行われる。出場者が松美池の冷たい水と、底に溜まる泥やその臭いに苦戦しながら走る一方、観客は配布される「競馬新聞」を見て、1位と2位を連番で予想し馬券をもらう。的中すると、模擬店で使える割引券が渡される。本馬戦では出場者それぞれに三人四脚やコーラー気飲みなどのハンデが課される。

「新馬戦」では、真っ白な衣装に身を包み馬の被り物をした新入生16人が登場。お互いに転ばせあうなどして泥まみれになりながら全力疾走した。新馬戦後は、本馬戦に出場する2、3年生が芸能人や著名国会議員などに仮装、ものまねなどの芸を行い会場を沸かせた。

「本馬戦」の熱戦を制したのはお笑い芸人のブルゾンちえみ with Bに扮した「アルゾンテッコ with D」。同チームの今村鉄心さん（社学2年）は「パフォーマンスで観客が笑ってくれてうれしかった。折り返し地点を通過した時に優勝したいという思いが強くなり、先頭を目指し走った」と話した。

実行委員長の五十嵐駿さん（同3年）は「今回は晴天で、最高の松美記念日和だった。伝統ある企画なので来年以降も続いてほしい」と話していた。

松美池に飛び込む学生ら（11月5日、松美池で）＝木村誠撮影

秋空の下 汗流す

秋季スポーツ・デー

第41回秋季スポーツ・デーが11月18、19日に陸上競技場などで開催され、多くの学生や教職員が汗を流した。

初日は朝からの雨天の影響でサッカーやソフトテニスなどの屋外競技が中止になり、屋内競技だけでの実施となった。2日目は一日目と打って変わり天候に恵まれ、駅伝などの屋外競技もあり、予定通りに行われた。また、陸上競技場などでは体操部やアーチェリー部などが体験教室や公開練習を行う「サークル企画」や、追っかけ玉入れやチャンバラ合戦などの「学生委員会企画」も行われた。

スポーツ・デーを運営した学生委員会委員長の百瀬彩さん（メ創3年）は「初日に雨が降ってしまったためどうなるか不安だったが、無事終えられてよかった」と話った。

体操部のサークル企画で、初めてトラートを体験した男子学生は「最初は怖かったが、体操部の方が教えてくれ、とても楽しめた」と話した。（佐藤有里＝日本語・日本文化学類1年）

多種多様な人と生活

世界の教室から

サラマンカ大学（スペイン）　岩崎直人

「本場でスペイン史を学びたい」とスペインのサラマンカに飛び込んでから早3カ月。旧市街全体が世界遺産となっていて、大学や大聖堂を中心として中世の面影があちらこちらに残った歴史あるこの街での生活に、日々幸せを感じています。

私の留学先であるサラマンカ大学は、イタリアのボローニャ大学、フランスのパリ大学など共に最古の大学群に属し、あるこの街ですが、現在は大学が外国人向けのスペイン語教育に力を入れており数多くあるほかの語学学校も併せて多くの外国人留学生を抱えています。

テスなど数多くの偉人たちが学んだ由緒ある大学です。大学を中心に学生街として長く栄えてきたこの街ですが、現在は大学が外国人向けのスペイン語教育に力を入れており数多くあるほかの語学学校も併せて多くの外国人留学生を抱えています。

留学生たちは、ホームステイや寮に住んでいる人も一定数いるものの、多くの学生は数人でアパート（ピソ）を借りて共同生活しています。私が住んでいるピソは、フランス人2人、ドイツ人2人、ベルギー人1人、イタリア人1人と日本人の僕を含めて7人の国際色豊かな面々で大学の近くに住んでいます。ベランダからは聖堂や大学の一部を見ることができ、世界遺産の中で暮らしていることを実感します。

学ぶ環境として非常に整ったサラマンカですが、学外の活動も活発です。その一つに、サラマンカ大の言語学部東アジア学科の学生と日本人を中心としたアジアの学生とがカフェで自由に交流するイベントがあります。この催しは毎週木曜の夜に、お茶をしながら互いの文化や言語について語り合うものです。質問をし合うことは楽しく、覚えたスペイン語をアウトプットする良い機会にもなっています。同時に交流会に来たほかのアジア人や志を同じくする日本の学生と話すのも、とても良い刺激になります。また、日本で長く続けていた合唱をやろうと、サラマンカ大学合唱団に入団しました。合唱団には留学生を含めた学生だけでなく、大学のOBOGや教員も参加しており、世代、立場をも超えた貴重な交流の場にもなっています。

このように、非常に多種多様な人々と生活してきました。その中で戸惑いや困難も多かったものの、自らの視野が広がり、「世界の中の日本」また「アジアの中の日本」といった像がだんだんと見えてきたような気がします。来年6月まで滞在するわけですが、これからも勉学の傍らさまざまな人との交流を更に深めていき、世界的な視野を広げていきたいです。

（人文学類3年）

不法投棄　依然続く

男ら 粗大ゴミを物色

【1面続き】スキーストックの投げ込み。廃棄物の物色……。筑波大の平砂・追越・一の矢学生宿舎のゴミ置き場周辺で過去10年以上にわたり家電製品や粗大ゴミの不法投棄が続いている問題で、本紙記者は11月の3日間、平砂学生宿舎の粗大ゴミ置き場周辺で夜、張り込みを行った。その結果、見えてきたのは不法とみられる投棄がやまず、それが負の連鎖を招いている現状だった。現場から報告する。（木村誠、越智小夏）

粗大ゴミ置き場に侵入する外国人の男ら（11月28日、平砂学生宿舎で）＝木村誠撮影

■ゴミを投げ入れ

11月24日、午後8時。昨夜からの雨は、やみつつあった。気温3度。寒い。気象庁によると1月下旬の平均気温だった。平砂学生宿舎（つくば市天久保）の粗大ゴミ置き場前で張り込みを始め1時間がたっていた。

若い男性が粗大ゴミ置き場の前で止まった。自転車にまたがったまま周囲に目を配る。そして棒状のものを、宿舎に住む学生だけが使える粗大ゴミ置き場（天井なし）に投げ入れ、自転車で走り去ろうとした。

「すみません、ちょっといいですか」

記者が呼び止めると、男性は少し立ち止まったが、応答せず走り去った。粗大ゴミ置き場を確認すると、男性が捨てたのは、8本のスキーストックだった。

宿舎を問う

現場ルポ 解決遠く

■深夜に物色

その4日後、28日午後10時。張り込み開始から20分後、外国人と見られる男3人組が、粗大ゴミ置き場の無施錠の引き戸を開け、中に入った。周囲を警戒しているのが手に取るようにわかる。あたりの人通りは少ない。

男らは懐中電灯を使い、粗大ゴミ置き場を隅々まで15分ほど物色。時折、外国語での話し声が聞こえる。男のうち1人が、警戒するようにさっと周囲を見渡した。そして、張り込む記者の姿に気づき、記者らを凝視。この間、約3分間。結局、3人とも何も取らずに立ち去った。

乱雑に置かれた粗大ゴミ（12月2日、平砂学生宿舎で）＝秋田耕平撮影

■対策と課題

学生生活課によると、今年、粗大ゴミ置き場に投棄されたゴミの処分費用は、8月は約62万6000円、10月は約36万円。これらは入居者が支払った学生宿舎の利用料を財源とした経費で賄われている。

同課によると不法投棄を防ぐために8月には189万円をかけ4台の防犯カメラを設置。だがゴミを捨てる人物が学外者などかの特定はできていないという。同課の担当者は「粗大ゴミ置き場の施錠や防犯カメラの増設など、更なる不法投棄対策を行うことを検討している」と話している。

宿舎ネット改善せず

外部業者 対策に効果なし

筑波大学の平砂、追越、一の矢、春日、グローバルヴィレッジの各学生宿舎で無料利用できるインターネット（有線・無線）の夜間の通信速度が9月中旬から低下している問題で、発覚から2カ月以上経過した現在も通信速度の低下が続いていることが分かった。

宿舎のネットを提供・管理している業者は、10月末に対策を行ったが、それに効果がないことを認めている。業者は対策として10月末に遠隔操作で接続方式の設定を変更したが、本紙調査によると通信速度はほぼ変わっていない。業者は「入居者に迷惑をかけ申し訳ない。現在新たな対応を検討している」と話しているが「原因不明なことから、現時点では解決の見通しは立っていない。

学生宿舎業務を担当する学生生活課の担当者は「業者に学生宿舎各地区ごとに現地調査するよう求めることも検討している」と話した。（木村誠）

マラウイ団体 活動を報告

日本マラウイ学生団体が主催する「2017年度夏季休業中マラウイ共和国渡航報告会」が11月21日、3A棟で行われた。

同団体は日本とマラウイの交流を目的に2015年に設立。渡航経験もとに同国の生活や文化を発信している。今年で3回目の渡航だった。

報告会では渡航したメンバーが「世界最貧国」と呼ばれるマラウイの説明や同国での活動内容などを発表。活動内容の報告では、現地住民と一緒に生活し、運動会などで交流を深めた様子が紹介された。発表した杉木佳奈子さん（国総2年）は「現地の子供たちの多くは英語がわからないため、運動会の運営がなかなか予定通り進まず苦労した」と当時を振り返る。

同団体の代表、大平拓実さん（同3年）は「渡航者が年々増え、大学の武者修行プロジェクトに選ばれるようになった。多くの方が来場してくれて良かった」と語った。

来場者は「メンバーそれぞれがマラウイで感じたことが異なり、興味深かった」と話した。（柏このか）

晩秋のつくば路駆ける

第37回つくばマラソン

11月26日に「第37回つくばマラソン」（主催＝筑波大学など）が行われ、フルマラソンと10キロの部あわせて1万5058人のランナーが晴天のつくば市内を駆け抜けた。

フルマラソンは午前9時に筑波大の総合研究棟D前のループ道路をスタート。大学構内を抜け学園西大通りを北上し、北部工業団地で折り返した。その後参加者はつくば市役所まで南下、再び大学構内に入り、陸上競技場のゴールへと向かった。

男子フルマラソンの部はゲストランナーとして今大会に出場した藤原新選手が2時間18分8秒で優勝しプロの力を見せつけた。女子の部は松本恭子選手が2時間49分9秒で制し、3位に終わった昨年の雪辱を果たした。

同大会に筑波大生も多く参加。今回が初のフルマラソンだという大竹輝さん（社学1年）は「つくばマラソンのコースは坂がほとんどなく走りやすかった」と語った。また、大西美雨さん（同4年）は「練習不足で走り切れるとは思っていなかったので、完走できてうれしい。これを機に運動を続けたい」と話していた。（竹添そら＝知識情報・図書館学類1年、写真も。12面に関連写真）

観客の声援を受けながらスタートを切るランナーら（11月26日、総合研究棟D前で）

あるく探る tanbo

焼き物をつくる会

個性あふれる焼き物作り

辺りが暗闇に包まれる中、体育・芸術エリアの西に位置するアート&デザイン実習室からは光が漏れていた。部屋の中では会員たちが焼き物作りに励む。取材当日は入会を検討する10名ほどが焼き物の体験に訪れていた。

毎週火曜と木曜の放課後に実習室に集まって活動する。部屋の壁際には8台の電動ろくろがずらりと並び、いくつもの棚には粘土や顔料、作成途中の作品などが所狭しと置いてあった。作られる作品は、湯飲みや茶碗、髪留めやキーホルダーなど、会員によってさまざま。会員が作りたい時に作りたいものを制作するのがこの会の特徴で、全員が自由に陶芸を楽しんでいる。陶芸の経験者は少ない。技術は先輩から教わるほか、自分で専門書などから習得することが多い。会長の中村彩音さん（社1・2年）は、焼き物の魅力を「自分の個性を出せること」だと語る。2種類の土を混ぜる練りこみや、形を作る成形、そして素焼き、絵付け、本焼きなど多くの過程を経て世界に一つだけの作品が生まれる。焼き物の魅力はそこにある。

真剣に電動ろくろを回す中村さん（右）たち（11月21日、アート&デザイン実習室2で）

体験に訪れ、初めて陶芸をするという学生は、電動ろくろの前に座って会員のアドバイスに耳を傾けていた。おぼつかない手つきで電動ろくろでの作業に挑むが、粘土の形はいびつなまま。縁の高さが均一にならない。横で中村さんが、慣れた手つきでひとかたまりの粘土から茶碗を作り上げ、手本を見せた。その時間はものの3分。「ろくろの中心と粘土の中心を合わせるのが難しく、コツをつかむまで半年ほどかかりました」と中村さんは話す。

ほかの机では、会員たちが制作に励む。手動のろくろにひも状に伸ばした土を積み上げ、自分好みの器の形に成型する。この手法を手びねりという。電動ろくろでの作業に対して、形に制限がなく、どんな形でも自由に作れるのが特徴だ。会員の小川日菜子さん（芸専1年）は、縁が波型になった器を制作していた。「普通の器を作ろうとしていたが途中から縁が歪んでしまい、そのまま進めたらこうなった」と小川さんは話す。失敗から進むがままに制作を楽しむのも陶芸の面白さの一つだという。

会話しながら和気あいあいと制作に励むのを好む人もいれば、自分のペースで黙々と作りたい人もいる。自分の思うままに焼き物と向き合う会員たちは、今日も個性を光らせる。（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類3年、写真も）

Who's Who?

津軽三味線世界大会で尺八奏者としてチーム優勝

鈴木 隆也 さん（工シス 1 年）

尺八を演奏する鈴木さん（12 月 6 日、文化系サークル会館で）＝竹添そら撮影

5月3、4日に行われた津軽三味線世界大会で、津軽三味線と他の和楽器の合奏部門にあたる団体Cの部に尺八の奏者として出場し、チーム優勝を果たした。奏者として活動する一方、今年1月からは東京都狛江市にある工房で尺八作りを学び、一人前の「作り手」を目指し研究を重ねる。

尺八との出会いは4年前。高校卒業後、一旦は進学した明治大学で「なにか新しいことを始めよう」と、尺八や箏などの和楽器を演奏する「三曲研究部」に入部し、尺八を始めた。

そこで隠れていた才能が開花。全ての音を正確に出すまで3年かかるという尺八の世界で、全ての音を入部直後に奏でられた。その後もめきめきと上達した。ただ当時は「ただのサークル活動」という認識だったという。

転機は大学2年の夏。国立劇場で行われた演奏会に参加した時だった。数百人の和楽器奏者が、楽器を問わず参加して腕を磨き合うが、そこで若者らが人生をかけて和楽器に打ち込む姿を見て「自分も本気で尺八に挑もう」と決意。同時に明治大では学べない音響学を学ぼうと思い、大学2年の冬には筑波大を再受験して合格した。筑波大では邦楽部に所属。津軽三味線や箏を演奏する仲間らと練習に打ち込んだ。

練習を重ねる一方、限界も感じた。上達するほど、東京芸術大などで尺八を専門に学ぶ学生などの他の若手とのレベルの差を痛感した。一方で、若手の和楽器奏者が結成するグループ「和楽器バンド」の人気から、尺八を始める若者の増加を知り「増えてきている若手奏者の一人になるより、作り手になって良い尺八を奏者に届けたい」と考えるようになった。今年の1月には、多数のプロ奏者が愛用する「泉州尺八工房」の代表・三塚幸彦さんのもとで尺八作りを学び始めた。

尺八の演奏と製作に励む

「安価で本格的な一本 作りたい」

尺八作りは素材となる竹のゆがみを、加熱して真っ直ぐ整形する作業から始まる。その後、手元を通常5つあけ、内部の節など余分な部分を削り取り、パテを盛って整形する。最後に漆を使った艶出しなど、表面の作業をする。1本を完成させるのに約1カ月かかるという。

今はまだ修行中で、受け持つのは表面の仕上げ。竹の内部の作業は尺八の音質に直結するため、同工房では必ず三塚さんが手がける。「完成した尺八が奏者の手に渡る時はうれしい」と話す一方、「最も重要な内部の作業は任されておらず、自分が作ったという実感は少ない。早く一人で全ての工程をこなせるように、今やる仕上げから頑張っていきたい」

やりたいことがある。

現在使われている尺八には、竹製とプラスチック製の大きく2種類ある。通常1万円ほどのプラスチック製に比べ、竹製は最低でも約20倍の予算が必要。初心者の多くはプラスチック製を使う。だがプラスチックは、本来の尺八の音が出せないものが多く、「初心者が尺八の本来の魅力に気付けないこともある」という。

「竹製でも、一部の工程を機械に任せたり、電動工具を使えば、従来よりも高精度かつ低コストで仕上げることができる。そうした技術を多く取り入れ、より安価で本格的な尺八を多くの奏者に届けたい」

師と仰ぐ三塚さんの教えは「いい音を作るためには、まずいい音を知れ」。三塚さん自身、工房の代表として尺八を作りつつ、30年前から和楽器のバンドを組んで奏者として活躍する。「まずは一流の奏者になり、良い音の出し方を知りたい。三塚さんを見習い、当分は2足のわらじを続けたい」（竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

編集後記

記者にとって新しいニュースを取り上げることと同じくらい大事なのが「報じ続けること」だと思います。今号でも多くの続報が掲載されました。1面や特集では、蹴球部の関東1部リーグ優勝を取り上げました。私が同部の担当になった2年前は、創部初めて2部でプレーをしていた苦しい時期でした。その時から追い続けてきた同部の活躍は、自分のことのように喜びを感じます▼来号から編集幹部が変わります。後輩たちにも報じ続ける姿勢を貫いてほしいと思います。（編集長・小宮山瑛生＝社会学類3年）

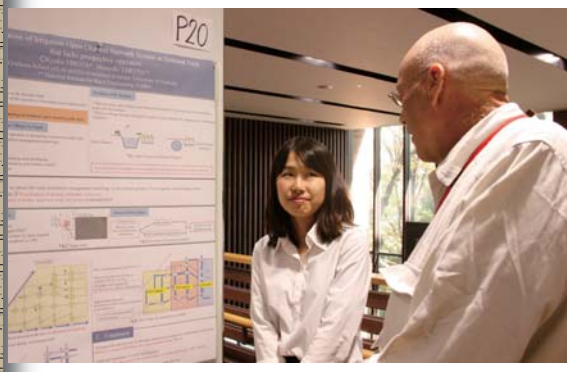
舎のゴミ不法投棄問題などを報じました▼スポーツでは、蹴球部の関東1部リーグ優勝を取り上げました。

識改革を願います。そのほか、新型印刷機の問題や宿

次号は **1月22日（月）** 発行予定です

学内総合

国際シンポジウム



学生によるポスター発表を通じて議論する参加者たち（11 月 23 日、東京キャンパス文京校舎で）＝中村瑞歩撮影

2 面へ

スポーツ

オリエンテーリング 準優勝

ロングディスタンス部門でラストスパートをかける増澤（11 月 12 日、岐阜県関ケ原町で）＝本人提供

3 面へ

学生生活

第 43 回雙峰祭

よさこいを披露する斬桐舞（11 月 3 日、石の広場で）＝木村誠撮影

0 面へ

学生生活

つくばマラソン

晩秋のつくば路を駆ける参加者ら（11 月 26 日、総合研究棟 D 前で）＝竹添そら撮影

1 面へ